

# 心中ふたつ腹帯

作者 紀海音

雑草に木にたどへて見れば若衆梅。女は櫻坊様の山吹衣ま袖より。牡丹のさかりんとしたうし武士の姿はおのづから。きうぶにそみたる紅の園生のたねや未葉まで。わきて遠州濱松は御家中廣き其中に。小身なれど手を置いておもき山脇十藏の。屋敷造のお物敷奇其折ふしの月花に。かへて嗜む武藝の道術も深き敷垣の。向ふに目あての塚を構へ本弓の稽古の。戸田卜齋を師範に立て門弟沼津李之進。南條定七奏源八いづれも弓矢引きつがひ。拳を固め肘を張り鉄を揃へ聲をかけ。我劣らじと争ひしはしいかめしう。こそ見えにけれ。卜齋はつくづくと稽古に氣を付け目を配り。何ッおのく見

事見事。射法力の入れ所村の内置矢の輕重。狸の吟味に至る迄残る所はなけれども。地どうでも體が固まらぬあながち人に射勝たうと。思ふばかりは勵みでない一ぶんに油断なく。工夫の心坐りなげ自然の中致すもの。既に孔子の曰ふにも射る事は君子に喩へ。あたざれば其身に求む。手前を直し随分と功を積むこそ第一と。フシさも細やかに云ふ所へ。主山脇十藏は同苗半兵衛諸共にかしこに歸れば卜齋。何ハア、十藏殿お歸りか。豫てお心安さのまゝお留守をも願みず。射場を借用仕りゆるく稽古致す段。無禮の至りと相違ぶる。十藏會釋して是は扱痛み入る。よい場を持ってば

品により物干にさへ貸すならひ。品に比といひ殊には豫て極の稽古日。在宿致す管なれども。同苗半六只今は名も半兵衛と改め大阪の住居。町人に罷りなり候へども當所の人數改めにて年に一度は極まつて判形に罷り越す。其儀によつて今朝より御役所へ召連れ出で。それより一家のはし／＼暫しの對面則ち今夜八ツ立に大阪へ立歸る。用意何かに取紛れ無事主の段御免あれ。コリヤ半兵衛。以前のお師匠友達衆對面致せと詞の下。半兵衛懇懇に。先づ以て卜齋様。御息に御凌ぎ。ひとへに満足仕る。師弟のちなみ折々は御恩の御見舞申す筈。何をいうても只今は商人の身の忙がしく。年に一度の参着さへ昨晚参りて明朝は罷り上る故。おのづからの如才者御免し下さるべし。李之進殿定七殿。源八殿を始めとして御無沙汰ばかり。

顔見れば昔を思ひ懐かしい。先づは御無事で珍重と身は町人を卑下しても。どこやら武士の花魁、八百屋さするぞ惜しかりし。下齋は手を打つて扱も扱も久し振り。山脇半六時分より殊の外肥満にて。究竟な若者其骨柄を見るにつけ。思ひ出すはこなたの藝。今迄鍛錬せられなば。恐らくはつかうせんものと。常々皆とも此噂町人とても隠し藝。折節射ても見らるゝか。いかに〜と問ひかくる。半兵衛は打笑ひ。仰せの如く私めも折角習ひ受けたる弓。何しに捨ては致さねども。町屋に道具散らばはねばもとより學ぶ人もなく。地宮地を心懸くれども。流行るは稽古淨瑠璃で。半弓も見あたらず。たま〜事に瓜時分東寺駒野へ行く足を。祇園の方へ駆廻り稽古を見ればぞく〜と。遠慮も忘れ肌押脱ぎ。よつびきひやうどやる風情。座中擧つ

て舌ふるひ。庭弱な男ぢやが。つても怖いゆ力と。手を置かれて歸りしも偏に能匠の御蔭ぞと。あだ粗略には存せねども毒物賣りの風情ゆゑ。残念ながら何時となう。消えて仕舞はん是非なさと〜へり下つてぞ語りける。さこそ〜推重した。五年十年射ぬとても心を捨てねば下らぬもの。構へてあり久しぶりぢやに只一手。其上是なる李之進前かど五角の藝なりしが。荒むと勵む違ひにて及びはせまいさりながら。互に挑みし所縁ありいざ立合つて勝負あれ〜見んとぞ勤めける。家の沙汰。我々しきが何ともはや。御免御免と辭退する十藏は聲をかけ。練に見ゆる半兵衛。差當て、お師匠の仰せを背くは無禮なり。手練達者の沼津殿町人の身が射負けしとて。少しも恥に

ならぬ事。龍り出でよと弓と矢を取添へて與ふれば。答に及ばず立上り。之進殿さりとは。久しうぶりのお相手と。云へどもをさめし不承顔。かぶり振れば半兵衛相手の不足は兎も角も。不興に見ゆる御出でと詞をかくれど返事もなく。苦り切つたる其風情定七見かねつつと立ち。時によつては氣不精に進まぬ事も得であるもの。云はせも果てず李之進聲を上げ。是々入らぬもの。師匠の御意を承る我等さへ動かぬに。外の媒介心得す控へられよと詞の下。然らば拙者參らんと源内やがて立つ所を。鑑を取つて引留め。ハレヤレ世話をややく兼ね。相手になればいづれの名が廢るが合點か。且はお爲を存するゆび(まゆび)是非〜お控へなされよと。物ありけなる有様に座はしらけ。てぞ見えにける。半兵衛もな

まじひに無念に及べどさらぬ顔。李之進殿手が悪い貴殿の藝を仕上げしとてさのみ高うは吹かぬもの。今今は格別其以前互に勝負を較べし時。五社明神の後堂百本が一本も。徒矢なしに見せつけ又。掛川の大会にも二日續けてゐもぎに勝ち。其外機により折にふれ餘程手ごりの覚えがある。その意趣ならば猶以て。わつさり立合はん。いざ御出でといひければ。李之進えせ笑ひ。珍しい事いふ男。シテ先づそちが某と弓のこぶしに勝つとな。ハテ先立つて知れた事シャ存外千萬な。其時相手に立つたるは慥か山脇半六とて。御家中の武家友達。大阪の八百屋づれ半兵衛とやらん素町人相手に取つた覚えがない。いはれぬ弓を引かうより分相應に算盤の。利合を引くが近道と。さも憎體に言ひこなす。半兵衛今は堪忍の胸に迫りし顔色を。卜齋早く見て取つ

て真中につつと出で。よしな所望仕出して半兵衛手前某が何とも迷惑致せども武士の權威を立てらるゝをたつとも申されず。と云うて是で果してはどうも一座が済みにくい。申立て、了簡せん。弓の稽古は取置いてこれから柔術の勝負を見よ。さあ〜急いで立合へとあせれば半兵衛力を得。いざお相手と差向ふ。李之進突り聲。武士町人の辨へなく再三のお望みは。お師匠にも曲なしと云はせも果てずヤア無法なり。李之進。もとより弓馬は武士の藝。取手柔術は町人も身の要害に嗜みて。すはや取るぞと立向ふに。武士は相手にならぬとて懐手してゐらるか。是非立合はざるまいがの。然らば有無に及ばぬ事。さあ〜勝負とせり立つれば。義に詰められて李之進不承不承に身拵へ。敵つがましくいざ來いとかさにかゝつてつつと寄る。心得た

りと身をかはし互にあてつけ跳ね合ひしが。半兵衛は手利の達者。ほぐれて蹴返す腰の骨。仰向にどうと倒れしは。心地よくこそ見えにける。塵打拂ひ李之進はふ〜起きて大聲上げ。表裏者の實人め。重荷に草鞋締めはいて。平生荒氣に働く故。畢竟相撲同前の暴れ業は聞にあはぬ。いで真劍の切先に命の取手を見すべしと。既に刀に手をかくれば。飛んでかゝるを定七源八李之進に取りつけば。十藏は半兵衛を引止めて叱りつけ。お師匠の御差配にて一旦の無念を晴れ。喧嘩は互に五歩の持ち。事相濟んだ其上に縦へ先から募るも。最早見ぬ顔聞かぬ顔穩便にをさまる筈。此上ながら卜齋老李之進殿心底に。憤りなき様に偏に頼み存すると。さも神妙に云ひければ。卜齋は打額きいかにも某受取つて。

重ねて盃させ申さんとかう云ふ間に日も暮るゝ。最早お暇申さんと皆打連れて立ちければ。李之進振返り。又たまゝ腕が利いたとて。いきり立つは商人故。武道は格別劍術が。知りたくば此方へ習ひに來い其時は。さつぱりと首と胴との別れの指南。鳴きやつと云はせて見すべしと。肘押張つて睨みつけ。さも憎さげに立歸れば。十藏親子は送り出で。慇懃に一禮し。次の一間に立歸り。互に今の無念さを胸に持てども持たぬ顔。十藏は何となく。コレ半兵衛。夜の短いに八つ立ち。草臥も續いたくつろいでお寝やれ。ハア是は勿體ない。若い時の辛勞は貰うてもせいと申します。御老體の養ひが大事先づお休みなされませ。ホウ老いては子に從へとは得手勝手の手。然らば行つて寢る程に。追付けまどろみ召されいと。言ひ捨てへ奥にぞ入りける。

半兵衛は差俯向きとつおいつの胸の内溜息ほつとつき出し。最前の悪言を無念と思ふ私より。百千層倍口惜しうお腹が立つてなりません。天晴山脇十藏と。誰に劣らぬ武士の身を。半兵衛といふ町人を子に持ち給ふ故により。いかい恥辱を見せまして面目なうてなりません。姿形こそ町人なれ。もとの侍の粹ぢやも。駈入つて死んでくりよ。イヤゝそれでは仁右衛門殿。よしない武士の子を貰ひ。愛目を見ると悔い恨み。歎き給はんおいとしや。武士と町人二人の親。中に立つたる半兵衛は。いづれへ孝を立つべしと。拳を握り居たりしが。短氣の虫のせき上げて。兎角堪忍なり難く。討果さんと覺悟を極めそつと立つて目を配り。奥を窺ひ床にある。硯引寄せ行燈の。火もかき立つる筆の跡死ぬる仔細は書かねども。是迄の御恩の書置一通り。

さら／＼と認めて。巻き納めたる箱の蓋。新觀油懸町八百屋仁右衛門殿。生所遠濱濱松。山脇氏と書く所に奥よりけしき足音。南無三寶と懐へ隠すとはいざ白無垢に。尻ひつかげ鉢巻しめ。手鍔かい込み十藏は。逸散に駆出づるを半兵衛やがて駈塞がり。互に顔を見合せ。ハツト驚くばかりなり。半兵衛は取絶り。死出立にてあわたゞしく。逸興千萬何事と。問はれて猶も氣を苛ち。ヤイ云はずとも知れた事。元來今日の口論も。もとを糺せば此十藏。娘が事を先立つて。きやつめが妻に貰はんと。ひたすら申越したれども。無骨者を知つたる故。再應便を受附けず。山名郡の代官。豊田新之丞と内縁を取結び。家督を立つる體にて。思ひも寄らぬ汝に迄。恥を興へし其段は許してくれよ半兵衛。エエさぞ無念口惜しかろ。見てゐる親を推

量せい。卽座に討つは知つたれども。汝に怪我のある時は養ひ親への言譯な。それ故事を鎮めたり。半兵衛が一分を十藏立てゝやるべしと。又飛出るを押しとどめ。おせきなされな待つてたべ。私が名を下さじと。命に換へての親の慈悲。忝くは候へども心を諍め御思案あれ。出合の詞争ひにも恥を研ぐは武家の事。町人の半兵衛が恥といふは駈落か。身上仕失うたるか。是より外は叱られても。ぶたれても踏まれても。此境涯の今の身に。一分立は候はず。然るに何の御生害思しとゞまり給はれと、シ事をわけてぞ詫びにける。十藏は聞入れず。其方ばかりへ義理でない。大阪の養ひ親仁右衛門方へ聞えても。たま／＼國へ立歸り恥辱を取るにきよろりと。實父が臨見してゐるはよく／＼半兵衛悪事ぞと。疑はせては猶立たぬ愛を放せと詞の下。

ハアさりとはは聞分けない。其仁右衛門も町人。國元へ行き手を廣げ。榮耀をしたと噂せば。悔み腹立ちあるべきが。喧嘩の場を穩便に済ましたと聞かれたら。いか程か喜ばれん少しも氣遣ひ遊ばされな。御身の武士引當てゝ世間の氣々も量られず。輕々しき生害はお年に似合はぬ御短慮。殊に追付妹が家督定め候由。子孫のためと思召しとゞまり給へと様々に。ヌチ心を籠めてぞ諫めける。十藏つく／＼聞入つてやう／＼と打額き。ムウ思ひ廻せば一理あり。然れば生害とゞまらんと持つたる鎧を下に置き。シいう／＼とこそ坐しにける。半兵衛は喜びて御聞入れ忝し。とても事に御誓言承らんと根を推せば。侍冥利大小かか神以て偽らない。扱其方はいふ如く。町人の氣になりぬいて。武士の恥は用ひぬな。ハテ扱あまり御念が入る。毛

頭虚言仕らぬ。ム、然らば慥かな誓言誓言。ハア何が扱町人冥利乞食になる法もあれ武士道は立てますまい。イヤ町人の誓言は利慾に迷へば不斷も立てる。汝に望む誓言は最前書いた状箱。只一目見て安堵せん。其誓言が望みぞとせり立てられて半兵衛。ハツトばかりにうろつく。十藏癡て立寄りて懐中したる状箱を。引つたれば詮方なく差しうつ。シむいてぞ居たりける。十藏涙をばら／＼と流し。汝が短氣を知りし故。襖の間より差覗き。最前よりの有様を一々残らず見届けし。二人の親の思ばかり思ひ出して大殿の。御恩の程は忘れしよな。十二の年より御前へ出で小姓數多ある中にも。勝れて御不便加へられ其餘慶にて十藏も。武士の御加増頂戴し。喜悅の眉を聞きしに。長崎よりの客僧。賢藏主といふ相人。汝に刃の難ありと密かに殿へ

傳へし由。殊なう驚き思し召し。御前に人なき折節某を招き寄せ。しかくの御咄天命とは云ひながら。陣中の討死か忠義の爲に相果てば高名ともなるべきが。短慮の生れ出頭なげの。當言咎め口論に討果さんは無慚むざんなり。町人にして一命を繋げとあるの重き御意。地もとより迷ふ親心何が扱我子の爲。畏り奉るとお受け申してそこ爰と。尋ぬる内に縁あつて仁右衛門方へ契約けいやくし。お暇乞ひに汝をば召連れ出でし其時の。亡君の御喜び今見る様に忝し。即ち只今差してゐる。藍紋あいのぶの脇差をお膝元より取出し。長く武道の絆きずなを切り。町家に住めば一腰は。命の親とも主君とも。敬うても飽き足らず。刃は命を亡せども。助かるも又刃なり。輕々しく用ひなと御手づから賜りしは。汝を守る寶劍なり。愛の深きは親なれども我子を君に差上ぐれば。忠義の爲に一命を

惜しむなと教ゆるに。町人にして其方が安穩なれとの御憐み。親十倍の主君の恩それを忘れて短慮にも。討果さんとは何事ぞ。天命知らずの不忠者とスエテ口説き立てゞぞ。泣きにける。地も稍あつて涙を押へ。状箱をしつかと封じ。我印判を取出しとちめにひしと押認め。半兵衛が前に据え。心を靜めてよつく聞け。其脇差は君の魂たま。此印判は身が魂。書置開くは死後のこと。それをとちるは大切な命の門を固むる封印。堪忍の縮口を開くまじとの誓文にも。起請文にも此文箱。肌身を離さず懐中し是神明のお祓とも。守りとも印文とも誓ひを立てゞ忠孝を。思はゞ身をば顧みて。死んでくれるな半兵衛と。心詞も瀧津瀬たきつせに袖は。筏と浮きにける。半兵衛前後涙にくれ物をも云はず居たりしが。押直り聲を上げ。ハア淺ましや勿體なや。主君の御恩親の慈悲養

父へ孝の三つの海。渡り較べて數ふればたとへ我身を百千に。碎きても飽き足らず生あればこそ骨に沁み。胸に通りし御意見を何しに餘所よすになし申さんふつと心を取直し武道は口にも出すまじ。過り入つて候とスエテ手をつかへてぞ詫びにける。十藏につこと打笑みて出来したり満足せり。いよく相違あるまいな。ハア何が扱驕へさぬ。ヲ、嬉しや落着いた。是もおぬしが可愛さと。又打解けし涙なり。是はや丑し三つの鐘の音に續くしやんく馬の鈴。門外に聲高く。ハア且那殿八つが鳴る。あぶつけ跡付兵衛ハツト立上り時刻に及ぶ御暇ヲ、ヲヲまめで。御堅固で。是程目出度い別れはない。さらりと笑うてく。顔見合するにつこりも後の。名残りなごりと三重へなり

## 第二

ノ難波津や。賑ふ門も小夜更けて。軒較  
ぶる鐘の聲。數は幾つぞ八軒屋。海士の  
源とかゝけたる。宿の行燈しんくくと。  
濱風あをつ上り場に。遠近人の下り舟。  
押並んでぞ擧り寄る。船頭眠りを呼覺  
まし。サアく着いたぞ上らしやれ。  
置忘れのない様に。諸事改めてといふ  
所へ。泊り宿の亭主。三笠屋與次兵衛出  
で來り。待つたく船頭衆。改める事  
がある。宵の内から我方に上の衆ちやが  
二三人。駈落者のお尋ね。嶋原の色ちや  
げな。残らず船を吟味して頼むくと  
牽けば。船頭ども聲々に。類船の内やう  
やうと女中は二人ばつかり。一人は内儀  
様一人は若いばつとり様。それくそこ  
へあがるも。勝手次第に穿鑿とさわめ  
く内にしとくと。苦もる露も情知る。

ゆかりに靡くなき袖や。小襟に色を抱帯  
はでな姿の女房に。婆の連立つ其風情。  
荒れし軒端に三日月の。光こぼるゝ如  
くなり。與次兵衛立寄り提灯の。影に  
見るより打領き。ママ大方これくさい  
者。ぬくくと駈落ちやの。追手の衆  
が此方にちやいざござれいとせる所へ。  
次の舟より半兵衛は遠州よりの歸り足。  
何心なくあがり場に男女のわめく聲。立  
寄りて小提灯ヤア女房か。半兵衛殿。こ  
れ伯母様扱々と。互に餘儀なく見えけれ  
ば。與次兵衛は猶うさんげに。叩へて  
様子を窺ひける。半兵衛はしとやかに  
どなたかは存ぜぬども。誰も心のせく時  
は人違はあるもの。まさしく是は身が女  
房外をお尋ねなされいと。云へども與次  
兵衛はぬ顔。扱は左様かいか様にも。  
町方のお内儀にはばつとかうとな御風  
俗。御亭様なら一連かと。思へばさう

でもありそむないはれや御鹿相申した  
と。オ。詞をへ残し歸りける。半兵衛  
打笑ひ鹿相者と悪銀は。いかさま世間に  
多いもの。して先づお千代伯母様と。何  
故の上のぼり。お袋様は御無事なかう  
ちや様子が聞きたいと。詞の内よりせき  
立つてお千代は纏て取付くを。伯母は駈  
寄り引放し。エ、未練な。なんにも云  
やる事はない。地こつちへおちやと手  
取るを。半兵衛とどめて興醒め顔。伯  
母御はいかう不機嫌なが。女房に恨みが  
身にあたりか。地何とも合點の行かぬ事  
お千代どうちやと尋ねれば。伯母はいよ  
いよ氣を悶え。扱しらくしい空とぼ  
け。それに嵌つてお千代はの。とだけ御  
れになりました。地はあこれも云ふまい  
さあ来いと。急ぎ立つれば半兵衛は。な  
ほも回ふに立隔て。それは餘りに頑固。  
疑ひまがひもある習ひ。善悪共にい

つまでも様子を聞かんと苛ちける。お  
 千代涙の下よりも。問はぬもつらし問ふ  
 も亦。武藏鎧のかけてだに。知ろし召さ  
 れぬ事ならば。聞いて憐を、かけてた  
 べ。お留守の内に思はずも。姑、去の  
 力なく。しよう事なさにすごとくと里へ  
 戻りて母様の。朝な夕なの煙さへ立乗ね  
 給ふ其中に。四五日かゝつてゐる内に。  
 此伯母様が京参り。立寄り給ふを幸ひに  
 行くへ定めぬ下り舟。淀まぬ水の縁に  
 て。相見る顔は變らねど。變るは今の我  
 身の上。男の心は川の瀬に譬へてあれど  
 自らは。飽かれた仲とは思はねど。母様  
 や此伯母様は。お前も一つ辛さぞと恨  
 みて今のすね詞。言譯をして給はれと口  
 説き。歎くぞ道理なる。牛兵衛ハツ  
 ト怪顧して。騒ぐ心を押鎮め歎くは道  
 理さりながら。不慮に爰にて出逢ふが夫  
 婦の縁の切れぬ故。思案しがくもあるべ

きぞ氣遣ひすなと言ひ宥め。これ伯母  
 御。お腹立ちは聞えたが身どもへあたり  
 は不了簡。當月初めつかたよりも参宮致  
 し直ぐさまに國元へ罷り越し逗留は只三  
 日。其外は皆旅の空狀通致さん様もなし。  
 留守の間の言事を牛兵衛も一所とは。

二の腹帯

初辰





廻り過ぎたるお疑ひ。機嫌直して此上の相談あれと詫げければ。母ナウあてどのない事恨めうか。こなたと豫て相談の儘かなしるしは見やしやれ。姑御の直筆。お千代をば去状。夫婦の仲の退き去りは誠の親でも我儘に。さつぱりとはならぬもの。腹貸さぬお袋が心一つで書かれうか。是でも物が云はるゝかと。半兵衛に投付ければ。不審ながら取上げてつくつく見れば暇の状。是はとばかり差俯向き二度。呆れて見えにける。伯母は恨みの詞さへ胸に餘りて目に涙。聞えぬぞや半兵衛殿。こなたは元が由ある身仁右衛門殿も歴々。千代が一家は吹けば散る。こちと風情は疎まれてもとより縁はきたないもの。女房さへかはゆくばそこに隔てはあらぬ筈。姑御のさがなうて取りにくい御機嫌に。辛抱するは何故ぞ男の顔を楽しみに。暮下女房に口出



して最戻こそなるまいけれ。陰日向になる程の氣骨は折つてやられても。さのみ人は叱るまい。云ふではないが可愛そに

物も見事縫ひまする。書出し一つする程の目は親達があけて置く。紡績なら人あひなら。器量はこなたの覚えてなり。ち

つとの落日は華美なれど若い時が二度は  
ないさのみ無理にもあらぬ筈。花の盛り  
を狼狽へて京の親元三界へ。行てもむら  
れぬ貧しさを睨み合うても濟まぬ故。身  
の片付きを奉公と思ひ定めて連れて來た。  
さぞ本望でござらうと。たくりかけく  
フシ口説き、卿つぞ道理なる。半兵衛  
始終を聞入つて成程く一通り。かう見  
た所は私に恨みはことわりさりながら。  
神以て存ぜぬ段。いか様の義も致さん  
と。立寄る拍子に懷中より。狀箱の落ち  
けるを伯母は取上げつくく見て。宛  
名は八百屋仁右衛門様山脇氏半兵衛とは  
こなたの事ではござらぬか。狀通は致さ  
ぬとぬけくとうよう云はしやるなう。  
定めしお千代が事であるどのよな惨い談  
合ぞ。封切つて見ましょわい。いやく  
さうした物でない。此方へ遣はされい。  
ハテ紛れない隠すまい。讀んでなりと

も腹愈んと既に封印切りかれば。半兵  
衛周章でもぎ放し箱を開くれば忽ちに。  
疑ひは晴るれども親の意見の命の封。切  
るに切られぬ恩愛の深きに代へてさがな  
くも。養ひ母の胸慥さ思ひ廻せどさすが  
又。隔てし中と義を立て、口には出さぬ  
品々の。恨みはせめて目にもる、フシ涙に  
晴らすばかりなり。お千代はくわつと  
せき上げて。欺しやつたの抜きやつた  
の。其心とは知らずして母様や伯母様  
の。恨み誹りを言ひ有め半兵衛殿はいと  
しげに。さもししい心はござらぬと發言  
放つて今更に。面目ない恥かしい恨めし  
の男やと。肩に喰ひ付き膝に寄り身を問  
ゆれば袂より一通の文落散つたり。半兵  
衛ちやくと取上ぐれば其手に取付き囁付  
いて。大事の物ぢや戻してたべ見せては  
悪いと周章てしを。取つて突退け睨みつ  
け。去られた様子が知れかゝる。勿體

なくも母人を邪険な心と恨みしが。却つ  
て慈悲であつたよな。暇を取りは取つた  
れども不慮に遇うての間に合ひ口。間男  
の出合ひ宿。伯母御のいかつい返禮に。  
痴話文讀んで聞かさんと。封押切つて繰  
開けば。コハいかに最期の一通。ハット  
思へど心を鎮めて讀上ぐる。形見ながら  
に書置の事。一つ我身拙うして半兵衛殿  
と夫婦になり申す上は。お二人様をば誠  
の親より大切に思ひとら。されども足ら  
はぬ心からお氣に入らぬのみならんに。  
今迄の御憐み。天山忝く思ひとら。一  
つ夫婦となり申してより。つひに一度の  
詞も荒らし申さぬ中に。思ひも寄らぬ別  
れを致し候事よくく縁の切目と悲し  
さ此事に候。一つ高麗橋の伯母様へ。歸  
り候事も恥かしく石町の伯母様。京の母  
様いづれも貧しき暮らしに候へば。身を  
寄せ候事も痛はしく候。かれこれ思ひに

せまり命の際ははになり申し候。残り多きは盡させぬ仲。取合けかはゆきは宿りし我子。共に消失せ候事わく方もなきこの身の因果。夢の世の中とは申しながら。又改めて夢のやうに。かへすもはかなく思ひつゝかしく。唯ハツトばかりに讀み終り。三人共に差俯向き。聲も立てず泣き沈む。お千代やうく顔を上げ。とやかう思ひ直しても。夫に離れ長らへてあらぬ命と覺悟して。此世の名残り母様にお目にかゝつて其後は。身を淵川たはに沈めんと思ひ詰めに伯母様に。逢うての後は折もなく。今迄長らへさぶらふぞや此世の縁は薄くとも。未來で長く添ふべしと。楽しみにした我身をば。惨あはいとばかり半兵衛を。じつと見やりし目の内に。恨みと戀の二瀬川ふし満ちくる沙ぞ涙なる。伯母は思はず聲を上げ。ア、しほらしの心やな。世には去られた

夫への。面當つらのまた意地のとて。ついで嫁よめくもあるに扱。命を捨て、先の世を頼むと迄はいにしへの。嫁よめにも勝るべし。さりながらとつくりと合點をして見てたも。そなた一人を親伯母が。頼み切つたる杖柱男へばかり道立て、二人に孝はないものか嫁入さうとも云ふまいし。奉公さしよとも申すまいいかなる貧苦を凌いで。まめな顔見りや嬉しいぞや。必ず死んでたもなと。罵ののり。咎とがもせつなけれ。半兵衛涙拭ぬぐひ。思ひ詰めたる志満足せり過分なり。何を隠さん某も國元で口論し。打果うさんと思ひ詰めはや書置まで認めしを。親十藏の御意見に命を繋ぐ封印を此狀箱に捺おされし故。深き疑ひ受けながら開く事なりがたし。半兵衛が書置は父が見付けて命を延ぶ。今又そなたの書置を半兵衛が見て助くるも。奉行末目出度い吉左右きつざうなり。町衆又

は同行中たゞき廻して近日に。再び内へ呼戻さん伯母御お千代を暫しの内。こなたへお預け申したい。ふ、口では見事さばけれど。いつまで草のつり詞。地色合點がゆかぬとかぶり振る。半兵衛は思案して。然らば今より口を切つて五日が内にさつぱりと。お千代を内へ呼入れん。それ迄のお情を了簡りやくかんあれと手を摩れば。伯母もやうく聞入れてさうさへなれば互のため。もしも五日が過ぎたらばこなたの内へ持込むぞや。それ迄何しにせつばして。手廣う迎ひにやります。違ひはないの。習文と。互に堅めめる折ふし。駕かやりませう駕かやらい。ふしやりましたよいとぞ云ひかける。幸ひ東も白しろんだり人目を忍ぶ夫婦づれ。千代をば乗せて駕かのとに。付けしねうちも坂東聲。實盛まねなりと人を見ん。かゝる所へ與次兵衛が。噂うわさに寄りし八はの者はたゞ

と駈來り。此鴉なは紛れ者ソレ引出せと罵れば。半兵衛駈隔て。近頃無體千萬。此内は身が女房。荒氣を出さずと通られと。ことわり云へば聞き入れず。お内儀様拜みたいく。フシとばれかゝれば。ヲヲ女房の開帳なら。先づ三百目持つて來い。ヤア僞るまいぬかすまい。それ見よと駈寄るを。ならぬと支へて入り亂れあなたへ押合ひ。こなたへくづれ。暫し捻ぢ合ふ其隙に。一人はづして駕をあけ。提灯かゝげびつくりと。こりや違うたと飛退けば。皆一同に首尾悪く採手をして腰かじめ。ハハハハハハ。結構なお内儀様。是をついでにお近付き。笠の御用に立ちましょと。フシ云ひ捨て、こを逃げにけれ。半兵衛怒り押鎮め。本意なけれども親よりの意見の状箱押戴き。堪忍するが町人風。女房は又當世の風世間の人が誹らうが。母者がくすべ

### 第三

うが。此ばつとした佛を。我等が宿のお千代ちやと打連れ。てこそ三歸りける。三世の中はしんきくの新うつぽ。地水火風を借住居。光陰早き八百屋見世内證ともに吉野葛。結れた親父は結構者ふきの姑にが口に。嫁菜の袖をひたし物千代とはあだの女松茸。二世の縁さへ潮にはる。淺草海苔と身は焦れ。何としやうがも松露にも。心ばかりをつくくし。筆には盡きぬ愛きふしや。宵庚申を精進のだしに使うて半兵衛は。晝より出でし留守まより仁右衛門甥に嘉兵衛とて。戀の物馴れ譯知りが首尾をくろめる硯。手代利介が算盤も。フシ氣のとくくと弾くなり。後世のもとの念佛講閣路を照らす小提灯。仁右衛門夫婦奥より出で。ホ、ウ嘉兵衛。奇特に精が出る。

若い間は銀すき。年寄つての談義すき。是人間の一大事同行結の掛錢も。ない袖振つてはつきあはれぬ今宵の當屋はいつとも。法度を背いて夜食が出る。酒もしゆんだら夜が更けう。半兵衛が追付け戻る迄見世をばあけな寝まいぞと。老の練言こまやかに。詞のあとも針を持つ姑はつこと聲。半兵衛は今夜戻りやせぬ。表も裏も締めて腰や。夫婦が聲で叩かすば必ず戸をばあけまいぞ。合點がいたかと云ひければ。コレか。さかなう物をおいやるな。養子に來てから今日迄。夜泊りをせぬ半兵衛が。庚申参りすればとて戻るまいとはなせおしやる。サア半兵衛の参りやつた庚申様は石町。伯母の所へ先度から嫁の千代めが來てゐるげな。顔突合せ夜もすがら庚申待をしをらうと。女の性は嫁や子の中も法界愷氣口。内外の者の聞く前も迷惑さう

に仁右衛門は。はて扱それもまゝに  
しや。見ざる聞かざる云はざるが。庚申  
様の御誓願。知らぬが佛南無阿彌陀。南  
無阿彌陀佛と繰繰る數珠の。咳きながら  
打運れてオッ表へへこそは出でにけれ。  
フシ接木の。枝は。雨露の。恵みも薄き桃  
櫻。半兵衛夫婦が身の上に今こそ。思ひ  
知られたれ。色五日と限る約束の今日さ  
へ暮れて初夜の鐘。覺悟は胸に極まれど  
同行中の扱ひを。もしやとばかり頼みに  
て。知死期待つ間の二人連親の目盗む夜  
歩きは。我宿ながら忍ばしくそつと潜に  
耳寄せて。フシ内の様子を窺へば。嘉兵  
衛は筆を持ちながらつくづく物を思ひ  
顔。ナント利介。お婆が先の氣相でも。  
寺同行の御意見で。邪険の角が折れうか  
い。イエ〜存じも寄らぬこと。生れ付  
いたる熊手性。今度の起りも根が窓から。  
按摩取の印可めが。跡先なしの饒舌口さ

る浪人の娘とやら。年は十八數銀は大金  
で七十兩氏系圖より確かなる商人へやり  
たいと。頼まれますと聞くとはやわし  
いわろが小聲になり。どうやらそれは耳  
よりな。かね〜お主も知る通り役に立  
たずの嫁御寮。さざらりと去つて其跡へ  
どうぞ世話して貰うてたも。燭をして來  
い一杯と天目酒に呑込んで。先へ言込む  
こちらへも。返事聞かせてひつそ〜。領  
き合ひの最中と。聞かさへ胸もひいやり  
とお千代はそこを立退けど。半兵衛はま  
だまい〜と。フシ遣入りたさうに覗きぬ  
る。袖口取つて引戻し扱衆の返事迄。  
待つこともない我々が。最期の衣裁も守  
り迄。小宿へ出してある上にうろ〜そ  
こに居給ふは。今の咄にお心が残りや。  
すると恨むれば。ア、よしない事をい  
ふ人かな。おれは心が残らねど。去られ  
たそちを此内へ。呼戻したる心にて中戸

口から手を引かば。それぞ誠の夫婦づ  
れ恨み悔みも晴れぬべし。思案こそあれ  
暫らくと立忍ばせて半兵衛は。潜押しあ  
けずつと入り。兩人共に待つたである。  
日暮れぬ先に戻らうと思ひの外に當月  
は。いつにかはつて大参り仔細を聞けば  
去ぬる夜。音楽響き花降りて雲中に御  
聲を上げ。庚申の御神體青面金剛童子と  
は。文字も青き面と書き青きを好み給ふ  
故。青物賣りを守らんとあらたに御告げ  
ありしよし。言傳へ聞傳へ市の側から打  
ちあけて。参る程にける程に御門前  
押合うて。罎口の緒へ取付く迄ゆつくり  
と三時半。かゝる尊き物語聞いて内には  
ゐられまい。嘉兵衛も利介も参つて來い。  
参れ〜とそやされて。常も利介はとび  
介で。帯もそこ〜。駆出づれど。嘉  
兵衛はじろりくわんとした。顔付さへも  
氣味悪く。やゝ暫したためらうて。親父

や母は同行衆兎や角とある挨拶に。夜明  
けでなくば歸られまい。隠れて嘉兵衛も  
参つておぢや。いやまあ止に致しましよ。  
相場の悪い折節ひよつと知れたらあの婆  
が。並大抵ぢやあるまいと。取つても  
つかぬ挨拶に重ねて返す詞なく。成程そ  
れはよい嗜み其心から此頃は。商賈に精  
が。いる且那衆から青物の。御用はいうて  
來なんだか。誠<sup>まこと</sup>に忘れて居ります。  
平野屋殿から明日は振舞をする半兵衛  
に。ちよつと参れとお使が二三度も立ち  
ました。ム、さうである。行かずば  
なるまいさりながら。殊の外なる草臥や  
う名代<sup>みなしろ</sup>に往て聞いておぢや。イエ、先  
より念入れて。戴立も相談する。直きに  
とあるの御使。御太儀ながらと動かぬ  
ば。半兵衛はわざと腹立て聲。仔細を  
こねる男がある。獻立一つ書く程の器量  
を持たぬ其方なら。明日が日にても半兵

衛が死んだら八百屋仕舞ふかと。衛きめ  
付けられて是非もなく不審頭して出  
て行く。影見送りて表へ出で千代が手  
取つて引入る。跡は鎖しに詮方も  
涙先立つばかりなり。千代は覺えず聲を  
上げ移れば變る世の中や。二人添寝の諸  
白髮千年と頼む我家を。今日は冥途の旅  
やどり手馴れし襖押入れも。名残惜しげに  
あそこ爰。見世の先なる小板敷撫でつ擦  
つて戴いて。仁右衛門様の折節に爰に坐  
つておはせしと。思ひ出すも懐かし  
や。不調法なる自らが悪い所を陰にな  
り。日向になつて明暮に。姑御へのお取  
成し。數限りなき御恩をば死してもいか  
で忘るべき。去らるゝ朝も膽して手づか  
ら御膳据ゑたれば。物をもいはすほろり  
つと。泣いてお箸を取られたる。其面ざ  
しが見納めとなり行く身こそ悲しやと  
むせかへ。るこそ。道理なれ。色とも

に泣音の半兵衛。尤なり。さりなが  
ら。そなたの事は數ならず國を離れて  
十五年。誠の親より大切に介抱ありし甲  
斐もなく。先立つ我は不幸とも物知ら  
ずとも思されん御心底こそ恥かしとしや  
くり。上げてぞ居たりける。餘所にも  
嗚な。袖の雨。風呂敷包み手に提げて。  
嘉兵衛すたゝ立歸り。しやくれど開か  
ぬ表口わるゝばかりに打叩く。二人は  
はつと立上りよろつく内に外よりは。あ  
けよゝと喚く聲。ヲ、ゝとばか  
りにて。あなたこなたと道ひ廻り。やう  
やうと身を押込に。千代を忍ばせ半兵衛  
は。戸をあくれども打開けぬ。胸塞がり  
てきよろゝと。物を言はず立ちま  
へば。嘉兵衛も共に隅々を覗き廻りて  
押込を。あけんとするを立隔たり。嘉  
兵衛慮外な何故あくる。ハテ珍らしい御  
咎め。此押込は道具入れ。用があつてあ

けまするイヤ／＼用があるにもせよ。宿へ戻つて直ぐ様に。其上包んで手に提げしは。いづかたで取つて来た。ム、風呂敷包みの疑ひなら。是御覽あれ赤毛氈。ハテ似合はぬ物を持つてゐる。イヤ様子は追つて申すべし。夫婦の衆の留守の内。地櫃のとろくへ納めんと。明けにかゝれば手を取つて。近頃小氣な男かな。見付けられたら半兵衛が遠州土産と言うておけ。先づ下に居よ商賣の返事が聞きたい獻立は。ッ、どうぢや／＼と紛らかす。地色詞のはづれ顔の色心は附けど附かぬ振。押鎮まりて畏り。明日のお振舞お客の方から獻立が。謎に致して参りしをあらましばかり覺え書き。聞し召せとぞ讀上げける。先づ本汗に大寺やほとりに遊ぶ童は。ッ、ちしや白魚と知られたり。有情非情の乗合に棹なき舟の行方とは只焼などの事ならん。木の葉折り敷く

其上に。からくれなるの心中とは。哀れとぞ見る子持餅。添ふに添はれぬ中々にいつそ刃に刺身とは。包めど我が吸物に幾度肝を冷し物。思ひ直してたび給へ。折が變れば氣も變り。又面白い獻立の出來まいものにも候はず。定めなき世は人の常何をか恨み葛餅が。後段の筈に候と。心に餘る意見狀押當て。こそ讀みにける。半兵衛はさあらぬ顔。扱面白き獻立や。併し魚類の振舞をなぜ着屋は請取らぬ。さればそれにも咄あり。お出入致す肴賣りに。堀江彌兵衛と申せしは。器量はさのみよからねど戀路の手だれ上手者。惚れたお山が三百人。忍んで逢ふが四五十人。中に取つても若松屋なをと互に腐り合ひ。女房に持つぞ持たれんと。契りをかはず間々に市とやらいふ生娘と。ちえ／＼くり事が嵩じて來て。はや五月の腹に帯。懸されもせず親も知り。

つい呼入れて嫁びろめ祝儀の樽を贈るやら。三國一を誦ふやらそこらあたりがざざめけばなをが燃え立つ胸の火に妓女傍輩が焚付けて。彌兵衛が往てゐる先々へ附いて廻つて恨み泣き。喰付き囁付きしがみ付き。去るか死ぬるか死ぬるか去るか。二つ一つとせたらげら孕んだ女房は去なされず。なをはいよ／＼堪忍せず。是非に及ばず心中し難波の野邊の草の露。名は繪草紙にとゞまりぬ色と義理とに迫つては。日頃の智慧も出でぬもの。そこが膝とも談合でこちとが様な者にても。明かして言はゞどうぞ又死なさぬ首尾もあるべきに。聞えぬ堀江の彌兵衛やと。ッ、むしりかけたる口占に。地色半兵衛ぎよつと行詰り物をも言はず押込の。内にお千代はわくせきと身を悶えたる胸震ひ。襖に響き敷居までびり／＼と鳴り渡れば。女はうちらで鼠泣き。男は外か

ら猫の眞似。フシ髪が中にもをかしけれ。嘉兵衛そろりと立上り。美濃屋しなど引かれては。元が息になる穿整とつかくゝと立寄るを。半兵衛周章で突倒し。嘉兵衛お主も相應の悪所遊びもする男。ひよつと出合ひの初戀を見現はしては興がない。そこらは粹め氣を通せ。通せ。と詫びにける。嘉兵衛疊打叩き。あんまりそれは曲がない。なぜ有様におつしやれぬ。私ことは二三度も追出されたる身なれども。伯父仁右衛門に色々と言立て、給はりし。お前の情で立つてゐる。嘉兵衛に何の遠慮があるいか程隠し給うても。聞かねど知れた御心底同行衆の扱ひが。叶へば重畳さもなくば刺違へんとの言合せ。見付けた所は違ふまい切なうも悲しうも。思召さるゝ筈なれども死なんと迄は短慮の沙汰。世に心中も多けれど銀に詰まるか

逢ふ事の。ならぬ切迫の時にこそ。八百屋といへば軽けれど勝手乏しい事はなく。上町邊に借屋を借り行通うても逢ひ給へ。たとへ五貫目三貫目帳面合はぬ事あらば。嘉兵衛一人が引負うてお二人の名は出すまい。命の代りに立てたいと思ひ込んだる私が詰らぬ。意見は仕らぬ。思案を變へて下さりませ。縛り付いても取付いても。中々死なせはしませぬと。誠を立つる男泣きやさしくも亦わりなけれ。半兵衛も稍涙ぐみ。慈悲なる親の血筋とて。頼もしい氣を持つものかない。お千代くゝと呼びかくれば。おもはゆげにも立出づる目は泣腫れて顔瘦せて。見交すばかり打守り。ナウおいとしやとスエナイふり外は。なかりけり。半兵衛心に思ふ様死ぬると言はゞ此者が。附纏うて離れまじ。賺して此場を遁

れんと世に嬉しげに打笑みて。聞げに負うた子に教へられ。淺瀬を渡るといふ如く其方が意見にて。兎や角思ひくづ折れしも洗うた様に打咄れた。借屋の事も内證も万端お主を頼み入る。當分は先づ親里へ戻して置くがよい道理。女房嘉兵衛に禮言やと偽り知らす目くばせに。お千代もやがて合點してお志の数々。どうも詞に盡くされず。夫婦が命の親様と手を合はすればこちらにも。若輩者の言ふ事を得心あつて嬉しやと誠と嘘の笑ひ聲。夢に夢見る如くなり。嘉兵衛仕濟ましたりと半兵衛はお千代と共に立上り。伯母の方まで背の内送り届けて明朝は。駕で故郷へ送るべし。親父や母の歸られたらまだ庚申から戻らぬと。どぎ／＼首尾を合はせてと言捨て行くを引きとゞめ。件の毛氈差出し。お駕の内の敷物に進上致すと申す儀は。慮外がましく候



へども嘉兵衛がための寶物。追出されたる其砌友達どもが指差して。疊の上では死ぬまいと藤言いふが無念さに。心直して去んで見しよ。それとも願ひ叶はずし辻下で死ぬるとも。毛氈敷いてゐるならば疊の上も同然と。意地を立てたが身の幸ひ。再び此家へ立戻る嘉兵衛にあやかり給へとの。御祝儀なりと言ひければ。お千代はちつと笑顔して何より嬉しいま心づけ。此毛氈で夫婦づれ夜の花見に參らんと。詞のはづれ氣も付かぬ。さすが若氣の不覺なり。然る折ふし仁右衛門夫婦同行衆と高咄はや門近く立歸れば嘉兵衛騒がすお千代をば。小櫃の先に屈ませて半兵衛共に椎茸の。若者を選つて居たりけり。仁右衛門戸口に立休らひ。太郎兵衛殿五右衛門殿七兵衛殿には取分けて。遠方といひ夜も更ける。平にお歸り遊ばされい。ハレヤレいはいれ

ぬ御遠慮。お膝を抱きに三人が申し合はせて參るから。七兵衛一人は歸られぬ。夜食は食べる引つかける煙草一服御亭主のお氣抜ひにはなるまいと。明くる潜戸我一とせり合ひへ内に入りけり。五右衛門先へ進み出で。早速ながら申しましょ。御夫婦共によう聞かしやれ。是の嫁御が去られても手前に損も仕らず。呼戻されても此方に別に利得もなければども。よく〱惡意に思ふ故背から今迄三人が。取付け引付け頃の。かいだるい程詫びれども。あへんども打たれぬは悔つての儀か但し又。大切な事餘所外で言つてわざな仕方ぢやと。ふくればしあつてかとはまで附いては來たれども。言ふべき程は最前に底を叩いて仕舞うた故。急に才覚なりませぬ。兩人出やれと押し退さる。太郎兵衛鬚に腰をか

あらざれば。何を仕落何を非難に去なすべき。姑去りに極まつたりたとへ五日が十日でも。お千代の顔を見ぬ内は。太郎兵衛が朝夕を。此内で養はれんかたがた。いかにと詫びにける。姑はつと出で。ア、太郎兵衛様よい推量。仁右衛門殿は佛様。女夫の仲はちんく。去なしたは此母。お前の様なよい衆の嫁御にしては似合はうが。此方づれの内にて飯をも炊かにやならぬ身で。肌には小袖鼻紙は。延べでなければ手に觸れず。しらはお寺の奉加さへ百目の銀は太儀なに。五兩とやらの櫛を挿し烏甲程鬢出して。太夫の道中する様に狭い所を八文字。そこらあたりの青物は。踏み潰されて芥になる。其費でも積つたら此身に成りみましょ。是が八百屋のお内儀に成り遂げうかとえせ笑ふ。七兵衛にじり寄り。おこなたの様に言ひ立つれば。訖言

の手はあがれども。どこを聞いても其様によい事ばかりは揃はぬもの。身どもが嫁は随分と。世帯はようする歩くにも。八文字は踏まねども一文字を得引かいで。是も又氣の毒。仁右衛門殿。そなたもちつと物言はしやれ。地鳴がこはさに黙つてか。結構者ちやと嘆されて。あんまり自慢遊ばすな。結構とは冥加の事。とうなんとは野老なり。せいなんとは芹の事。半兵衛運添ふお千代なら。小殿原ではござらぬか。もし闇の夜のつれをこの心中などを召されたら。取返しはならぬぞやちと相談もして見給へ。かにもおしやれば其通り。若い奴等の事なれば短氣を出すまいものでもなし。腹に物言ひありとも聞く。孫を愛して遊ぶなら嫁の憎さも忘れん。ナウ喚。何と思やるとやはらを入れてうら問へば。いか様こなたは如來様。三三十年身

油絞り溜めたる金銀が。忽ち水になる事を見ながら孫がかはゆくば。はてどうなりとなされませ。したかわしには暇下され。短い浮世に氣に入らぬ顔見て修羅を燃そより。頭こそげて未來をば。助かる様に致さうと。緩む氣色はなかりけり。仁右衛門今は詮方なく半兵衛嘉兵衛爰へ來い。様子は今聞く通りの事。いかにお千代に添ひ度うても母を坊主にやしられまい。叶はぬ事と思ひ切れ。扱又嘉兵衛もよつく聞け。今では心持直し身を持ちさうに見ゆる故。幸ひ甥御の事なれば家督にせんと思ひ付き。嫁を追出し半兵衛も出て行く様にしかけると。世間の人に語はれては仁右衛門が名が汚れる。一夜も足はとめさくれぬ今出て行けといひ渡す。嘉兵衛驚く氣色もなく。お前の詞を請けずとも此方から出て行くと。思案極めてをる故に恨みには思はぬ

が。胴慾なは姑御。嫁一人が憎いとて大勢に憂身を見せ。嘉兵衛は爰を出て行くと明日から路頭に立ちますぞや。寺参りの行戻り菰をかぶつて付け廻らば。餘りみめでもあるまいが。それでも嫁が去りたいか堪忍がならぬかと恨みても啣ちても。心つれなく返事せず見向きもせねば詮方なく。すつと立つて行く所を半兵衛は引きとどめ。ヤレ狼狽者どこへ行く。お暇が出たで去にます。先づ待て。イ、ヤ暫しとて押合ひへし合ひ引据ゑて。コレ親父様。早まり過ぎた御了簡。母の言分一々に尤至極と思ふ故。千代めは身どもが去りました。誰に恨みもないからは家出を致さう様がない。それに此者追出せば結局にお名が出る事。同行衆にも今迄の千代が扱ひ捨て置いて。親父様へ嘉兵衛をば。詫言頼み存すると。聞くより三人領き合ひ。

婆はこちとが手に合はぬ。仁右衛門殿は結構者。嘉兵衛事を詫びます。四ハテどうなりと御意次第。あんまり早うて本意ないとオリ笑うてへこそは歸りけれ。母は兎角の詞なく奥へはいれば仁右衛門も。入らんとせしが立戻り。半平兵衛一つ飲んで寝や。酒は憂ひを拂ふとは。醫書にも書いてあるげなと。フシをしをとして入りにけり。親の恵みは深けれど。御縁は今が限りぞと。お千代もそつと這出でて。共に見送る後影。嘉兵衛は何の氣も付かず締めあけにする潜の戸。早うと招けども猶も名残はをし鳥の。なかじとすれどせき兼ねて。わつと叫べば洩らさじと。打ちかぶせたる。毛氈の間より。間に三度出でて行く

### 道行星の数

我が戀路は糸なき三味よ。く。なん

のねもせで泣きあかす。見れば思ひの雲の帯く。短夜。心のせくにごさんせ。いやと。おしやろとこちやもう。さうさんせ。二人が仲に。名取川。おゝそれ。二人と二人と名取川。ナホラシ濡れて涙の血に染むる。フ田箆の島と。詠み置きし。難波のことも是ならん。よしあしのや變る世の。それも思へば夢うつ。フ。靱を出でて二人連。色の外なる色毛氈ひじき物よと肩にかけ。フ。オトリつらきへ名残も。今宵ぎりフシ生れかはりて。先の世は。とても殿御の古里の濱松へ風に誘はれて。ホ。フシ離れぬ仲の睡言を。仇になさじと思ひ詰め。夜の玉鈴道急ぐ。真知死期くる。数珠のかず煩惱菩提と聞く時はあの世ばかりの樂しみに。行かんとすれば卯月閣。涙にくれて道見えす思ひ。廻せばへはかなしや交せし。ことの淺からぬ。隔ての雲

の重なりて。二世と契りし仲を裂く。月に水まさ花に風。津村の土手をあだし野の。エ。其佛と草深き。ア。ド。螢かすかに。飛びつる。身より思ひの除ればや。フ。虫さへ胸をや。こがすらん。夜も早い。たく更けぬらん。わけとなき行く郭公。半。大。シ。まこと冥途の鳥ならば地獄の有様語れ聞こ。フ。聞くとはいかで。變らめや。今宵限りのうき命。止めて止まらぬ。三。瀬川。ナホ。岸に繋ぎし綱手こそ。弘誓の舟と。フ。觀念し。エ。歎く心は疊れども曇らぬ。空の星月夜。あらまほしやといふ星も。年に一夜の契りぞや。たとへば雲の上とても。天の河を隔てなば。人のつらさに變らじな。糸かけ星の。ほそぼそと。附添星や。妬むらん思ひ星とは七夕の。縁と聞けどまゝならぬ。フ。浮世に似たる類ぞや。光もうすく丑寅にあれば見ゆる星様は。フ。假のうつゝの

ほし佛。やどり星とはいつ迄も。二人妹  
脊變らぬ夫婦間。我身の果はずばる  
星。ア、思ふまい心からたとへ奈落に  
落つるとも。要跡に歸らじさりながら。

女はいとど罪深く。従ふ道も忘れ水。哀  
れ都のひばのほし。結び目とけて瀬江に  
うかれし事を思ふには。あまねき門に立  
寄るも。爰ぞ一念重願寺。念彼觀  
音。力ばし助け給へと諸共に。心をこ  
めて願ひばし亂れ心の亂るゝとも。利劍  
即是の誓ひにて。心やすく極樂に至り  
至らなこなたへと。五に勇め進む身  
の勸進所。にぞ着きにけり

捨つるに極めし。身の上も。そごるに心細  
けにて三途の川は目の前の。吹吹く風の  
小波や。空淋しくも名乗るてふ。死出の  
田長を友がねに。さいたら島の案山子か  
と。見るにつけ聞くにふれあの世に。たぐ  
ふぞあぢきなき。半兵衛お千代に差向

ひ。此勸進所のお寺には談義の絶ゆる  
時もなう。千萬人の参詣に一過づつの御  
回向も。つひに罪障即滅の法の縁こそ。  
頼もしき。爰ぞ最後の場所とやがて用意  
を敷きかくる。朱の褥の毛氈や嘉兵衛が。  
くれし其時は。長く身上持ち堅め町屋  
住宅据ゑよとの。心には今引替へて死  
出の門出の相違未來は蓮の臺とも。變じ  
て。浮むよすがぞと二人しづかに座を占め  
て。人間一生あさなへる繩の如くと傳  
へしは。今日の身の上。八軒屋で出合ひ  
し時互に書置明かし合ひ。危き命を夫婦  
とも通るゝ上は老先も。諸白髪まで添ひ  
果てん。思へば愁ひの文ではなく。結ぶ

の神の守札。末頼もしや目出度やと祝  
ひし事も夢現。醒むれば元の書置よな。  
とてもかくても死神に引かるゝ縁は辻占  
の。時のぎえんもなきものと身を観じ  
てぞゐたりける。お千代はいとど打萎  
衛は。武士を捨てよと御意見は。我が行

れ心中といふ二文字は。流れの女に限り  
しと昨日は餘所に思ひしに。今日は夫婦  
が身の上に飽きも飽かれもせぬ伸を。由  
ない障りに隔てられ仇に朽ち行く是非な  
さと。平伏し。てこそ泣きにける。半  
兵衛涙にくれながら。ア、おろかなる  
悔みごと。兎角二人が腐り合ひ。切られ  
ぬ縁を恨むがよい。女房去るに七つの法。  
去らぬに三つの教へあり。中にも親の氣  
に入らぬ女房に添ふは不孝なり。又去所  
なき妻を去るは夫の義にあらず。とくに  
そなたの親里は。養ふ風情もない貧家。  
すりや去所ない同然。去るに去られぬ教  
へなり。此二道に差詰まり斯くなり下  
る有様は。もとより覺悟と詞にはいへ  
ども洩るゝ露涙。痛はしや十藏殿。常  
さへ武士の突詰めた。氣質ながらも半兵  
衛は。武士を捨てよと御意見は。我が行

末を安穩に。あらせん爲の教へをば今やみ／＼と死したらば。さぞやお悔み歎きの程。思ひやるさへ。勿體なや。養親の仁右衛門殿。お氣の弱い生れつき。此譯を聞き給はば老後の憂ひ持病の種。彼といひはといひ一方ならぬ不孝の罪。空恐しき身の上とヌネ口説き。立つればお千代も亦。穗にあらはれて叫び入り。ア、我とても道ならぬ。歎きをかくるは同じ事。老いたる母の手一つに。育て上げられ人と成り丁度今年が廿四の。年重なれど今日が日まで。是ぞと思ふ孝もなく。つひには双に身を果たし。愁ひを見するばかりかは。入まへの程世渡る業。老の湯水は誰が取つて御心を休むべき。不孝ともつたなしとも。我からわかぬ身の上を。許してたべや母様と。ほとりも知らず手を合はせわつと。ばかりに泣きまどふ。半兵衛は顔を上げ。ハア

いつまでいうても同じ事。夜明けぬ先に最期をば心靜かに遂ぐべしと。西に向ひて手を合はせ。利劍即是彌陀號。南無阿彌陀佛と回向する。お千代は沈む涙さへ落ちて乾かぬ小視を。懷より取出し。斯うならうとは知らずして西の宮参りして。須磨や明石の名所をも。記し置かんと求めしが。今引替へて書置の。御用意もやと差出せば。ナウよい合點さりながら。我一代の書置は懐中の狀箱。心にも文言にも死する時節に二つはなし。そちこそ早う書置しや。イヤわしとて先達つて去られた時の書置が。小母様の手にあるからは。是ぞ末期のとゞめ筆。あだの思ひの數々はとてにも書きは盡くされず。しかし辭世の言の葉を殘し給へと勸むれば。半兵衛領き筆を取り。引げに世の常に死したらば。野べの送り引導に一句一偈も受くべきに。こ

の儘行かんはかなさよそなたも一首口ずさみ。自らはを引導とも經帷子の梵偈とも。回向の種と案じつゝ視引寄せ書付くる。文字もちら／＼星月夜。詠み續けたる其歌に。はる／＼と濱松風にもまれ來て。涙に沈むざんざの聲。お千代同じくかくばかりいにしへを。捨てばや義理も思ふまじ。朽ちても消えぬ名こそ惜しけれと。兩首一所に卷納め。半兵衛は懐中より件の狀箱取出し。辭世に相添へ前に据ゑ。思入つたる體なりしが。胸押しくつろげ脇差を。すらりと抜いて脇腹より。前へなれば引廻す。お千代は取付き聲を上げ。こは情なの御事や。女は心おろかにて覺悟してさへ狼狽ゆるに。ひとり先立ち給ふのは。扱は我が身を捨てるのか。恨めしや胸怒と。悶え震ひて歎きける。半兵衛ちつともわるびれず。女心の淺はかさよ。是程の擗で死なん

とはおろかなりく。様子あつての切腹。抱帯を二つに切り其一筋にて切口を。急いで巻けと聞くよりはや周章て、ほどく抱帯。心は何と白縮緬用意の剃刀取出し。せき狂ふ手も震ひながら。やうく中より押切つて夫の肌を引廻し。しつかと締めてうろく顔をながめて涙ぐむ。半兵衛詞おだやかに。そなたが最期の顔も見す。何しに先立ち行くべきぞ。此脇差は某が此地へ養子に來る砌。主君よりの拜領。武士の刀は忠義を胸とし。町人は又禮儀に差す。大切の一腰を武道にも用ひず。禮儀にもかゝらず。穢らはしき兩人が最期にばかり使はん事。勿體なし莫加なし。武士の眞似して引廻すは主君への追腹。山脇氏に立戻れば親十藏が封印も。破つて破らぬ道理なり。是からそちと死ぬるのが。今の八百屋の半兵衛ぞと。齒を喰ひしめて息を

つき。これお千代。その半分の抱帯。そなたが腹にしつかと締め。四月になるかならぬ子に。せめて末期の祝ひ納め。世にあるならば來月は。帯の祝ひよお乳母よと。さも勇ましくあるべきに。明日をも待たぬ今の身は。五月とも産月とも。つどめて名残を惜しむぞと。せざる涙にくれにける。お千代は帯を取上げて。しやくり上げく。前後涙に。沈みしが。生れぬ先に行末を頭堅かれといはた帯。それは世にある人の事。是はそれとは引替へて長き別れの親子の縁。斯くなる身とは知らずして嬉しや子をば産んだらば。二人が仲の楽しみに。明暮れ抱いつすかしつの。愛らしい事見る度に憂きが中をも忘れ。夫婦は猶も親しみの媒介となり一つには。世に子を。持てば世帯じみ。なり形をも憂すとや。然らば我が思はずの伊達も自然とやむである。姑御にも氣に入らうあら嬉しやな産宮様。平産させて給はれと。願ひし事はいたづらに。身持ながらに消えて行く。名残は我が身一つにて。別れは二つ人間の種を断つのも同じ事。何の咎なき腹な子を。共に死なする不便さよ。許してくれよと詞さへ。泣くく帯を取上げて。肌にも引締めて。顔見ぬ母が形見ぞと。渡す山かつら寺の晨朝告げ渡れば。いざや最期の時こそと座を打拂ひ身構へす。お千代は覺悟の面ざしも名残の花のあてやかに。露持ち餘る風情にて。手を合はせてぞ坐しにける。半兵衛につこと打笑ひ。出来たりいさぎよし。來は一所ぞ迷ふまじ。今ぞ限りと脇差を。取直せしがさすが又。長き別れの顔はせに。心も騒ぎ腕たゆく。差付けてはためらひ突かんとしては堪へかねて。暫し時

刻を。うつせしが。南無三寶おくれし  
と氣を取直し一心に。南無阿彌陀佛と刃  
の先。喉にぐつと突通せば。あつとばか  
りに身を閃え。手足を伸べて苦しげな中  
にも夫を打守り。打守りたる一念の輪  
廻の心ぞ。果てしなき。されども四つの  
借り物を返ししまへば油なき。燈火消ゆ  
る如くにて。がつくりと伏す有様は

れにも亦惜しかりし。半兵衛は。只一刃に喉笛を貫かれ  
て死したりけり。過ぎ頃の若緑木の下闇は青物や。町人な  
れどいにしへの。武道の燈か上げたる末  
に。名をこそ照らしける

右此本者以太夫直傳寫之頌句音節墨譜等不

殘毫厘令校合候畢尤加秘密全令開版者也

豊竹 上野 少掾

大坂 御堂筋 正本屋  
北久寶寺町 仁兵衛

